厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）)
「社会構造の変化を反映し医療・介護分野の施策立案に効果的に活用し得る国際統計分類の開発に関する研究」
総括研究報告書（平成 30 年度）

社会構造の変化を反映し医療・介護分野の施策立案に効果的に活用し得る国際統計分類の開発に関する研究

研究代表者　今村知明　奈良県立医科大学公衆衛生学講座　教授
研究分担者　小川俊夫　国際医療福祉大学大学院　准教授

研究要旨

疾病及び関連保健問題の国際統計分類（ICD）は、現在 ICD-10 から 11 への改訂が実施されている。本研究は、ICD 改訂による影響がわが国の医療全般に関わることを念頭におき、わが国において適切な分類をとりまとめて提言することを目的とする。本研究は、ICD 改訂動向研究、ICD フィールドトライアル研究、ICF 活用研究に関する 3 つの研究班により構成され、それぞれが研究を実施した。本年度研究では、ICD-11 国内検討会を組織し、ICD-11 に関する各学会などの意見を幅広く収集したほか、日本語化の検討や ICF との関連などについて幅広く分析を実施した。また、ICD フィールドトライアルを通じてその実用性について検討を実施した。ICF 活用研究では、その機能と実用化に向けた検討を実施した。ICD-11 のわが国への適用と ICF の活用について今後も引き続き検討を行う必要がある。

研究代表者
今村　知明
奈良県立医科大学公衆衛生学講座
教授
＜ICD改訂動向研究班＞
研究分担者
田嶼　尚子
東京慈恵会医科大学
名誉教授
中谷　純
札幌国際大学
客員教授
今井　健
東京大学大学院医学系研究科
疾患生命工学センター
医工情報学部門
准教授
小川　俊夫
国際医療福祉大学大学院
医療福祉学研究科
准教授
滝澤　雅美
国際医療福祉大学
医療福祉・マネジメント学科
講師
小松　雅代
奈良県立医科大学医学部看護学科
公衆衛生看護学
講師

A．研究目的

疾病及び関連保健問題の国際統計分類（ICD）は、わが国では死亡統計のみならず患者調査、DPC などの医療保険制度、診療情報管理などに

広く活用されている。現在 ICD-10 から 11 への改訂が WHO によって実施されており、わが国は内科分野の議長国を務めるなど深く関与している。2018 年の ICD-11 公表後、2019 年の承認に向けて、今後も構造や内容の改訂が実施されるほか、フィールドトライアルによりその実用性が検討される予定である。国際生活機能分類（ICF）は、わが国でも実用化に向けた検討が進んでいるが、ICF のさらなる活用や国際比較の実現には課題が指摘されている。さらに、WHO は ICD や ICF など WHO 中心分類間の連携やオントロジーの活用を検討しており、今後分類のあり方が大きく変容する可能性もある。わが国においては、ICD 改訂作業に継続して関与するとともに、ICD や ICF のわが国におけるさらなる活用を検討することで、わが国の医療の実態を踏まえた分類を構築し、より適切な医療情報を将来的に確保する必要がある。

本研究は、ICD 改訂による影響がわが国の医療全般に関わることを念頭におき、わが国において適切な分類をとりまとめて提言することを目的とする。また ICD 及び ICF がわが国にとってより適切な分類となるよう、WHO の検討の場で行うべき対応に資する基礎資料を作成することも目的である。3 カ年計画の本研究は、全体としては ICD 改訂動向研究、ICD フィールドトライアル研究、ICF 活用研究に関する３つの研究班により構成される。

（１）ICD 改訂動向研究班

ICD 改訂動向研究班は、研究期間を通じて ICD 改訂の最新動向を収集・分析し、ICD-11 の妥当性について検討する。また、わが国で現在利用している各種分類と ICD との違いを明らかにし、わが国における ICD のさらなる実用化と普及について検討する。これらの収集・分析した各種情報は国内の各関連学会と共有したうえで、ICD の改訂や活用における問題点や課題を集約して改善案を検討するほか、WHO 中心分類間の連携やオントロジーの活用についても意見集約を行い、提言を実施する。

平成 30 年度は、ICD-11 公表に伴う WHO 主催会議や WHO-FIC 年次会議などへの参加等により ICD 改訂動向に関する情報を収集し、さらに意見発信を行う。また本研究班で ICD-11 の日本語化に向けた検討を目的とした検討部会を組織し、この部会を通じて日本語化の内容や方法、手順などについて検討を行い、提言を行う。さらに、各種分析を通じてわが国に適した疾病分類の構築と活用について考察する。

（２）ICD フィールドトライアル研究班

ICD フィールドトライアル研究班では、研究期間を通じてフィールドトライアルにより ICD-11 の妥当性について検討する。また、フィールドトライアルの結果を踏まえて、ICD の改訂や活用における問題点や課題を集約して改善案を検討する。

（３）ICF 活用研究班

ICF 活用研究班では、研究期間を通じて ICF の実用可能性の検討を実施する。特に、ICF を用いた評価法や情報共有法の開発を試みるほか、臨床現場への適用とその結果の分析を実施する。

本研究は、ICD 及び ICF がわが国にとって適切なものとなるよう広く国内関係者から意見の集約を行い、わが国に適した疾病分類と生活機能分類を取りまとめるとともに、ICD 改訂や ICF 改正への適切な対応に資することを目的とする。また、ICD-11 と ICF のわが国への適用と活用の際の判断材料となる知見の集積も目的である。

今般の ICD 改訂はわが国の医療全般に関わることから、その影響は非常に大きい。わが国の実態を踏まえた適切な医療情報を将来に渡って確保するためには、ICD 改訂に関して情報収集と分析・検討し、国内外の関係者間の調整を踏まえて意見発信を行う必要がある。また ICD-11 完成に向けて、わが国におけるフィールドトライアルを実施し、結果の意見集約と分析、WHO へのフィードバックを行うことにより

ICD-11 の妥当性を高めるのみならず、わが国の実情に沿った ICD への具体的な提案が可能になる。ICF については、わが国の医療現場における活用が求められており、特にリハビリテーション分野での ICF 活用が有効と考えられる。これらの作業は今後のわが国の疾病及び生活機能統計の改善や有効活用のための基礎資料となる点からも非常に重要である。

ICD 改訂動向研究においては、過年度研究で国内 ICD 検討会を組織して ICD 改訂の種々の問題点を抽出・議論・意見発信を行い、ICD-11 の基本構造の構築に貢献した。研究 2 年目の本年度は、引き続き ICD 改訂に関する情報収集を行い、ICD 改訂の方向性について検討し発信したほか、日本語化 WG を通じて ICD-11 のわが国への適用について考察を実施し、また日本語化の作業に向けた各種準備を実施した。

B．研究方法

本研究は、（1）ICD 改訂動向、（2）ICD フィールドトライアル、（3）ICF 活用の 3 つの研究により構成される。

（1）ICD 改訂動向研究

1) 国内 ICD 改訂検討会の組織（平成 29～31 年度）

以下の関係学会の代表者などから構成される国内 ICD 改訂検討会を組織し、各学会からの意見調整を図る形で意見の集約化を行いつつ、課題の整理及び改善案の提示を行う。

日本内科学会、日本消化器学会、日本呼吸器学会、日本腎臓学会、日本内分泌学会、日本血液学会、日本循環器学会、日本神経学会、日本リウマチ学会、日本医療情報学会、日本診療情報管理学会、日本小児科学会、日本糖尿病学会、日本感染症学会、日本口腔科学会、日本眼科学会、日本癌治療学会、日本外科学会、日本口腔科学会、日本産婦人科学会、日本耳鼻咽喉科学会、日本整形外科学会、日本脳神経外科学会、日本泌尿器科学会、日本皮膚科学会、日本病理学会など

2) ICD 改訂に関する分析と提言（平成 29～31 年度）

ICD 改訂ツールなどに入力された情報を整理し、ICD-11 の問題点を抽出する。その際に、行政や学会など各関係者から広く意見集約した上で、問題点の改善案を提示する。

3) ICD 改訂に関する動向把握と意見発信（平成 29～31 年度）

WHO-FIC ネットワーク年次会議や各種 WHO 主催の会議に参加するほか、WHO や世界各国の専門家との電話会議を適宜開催し、ICD 改訂動向や ICD-11 構築についてとりまとめ、学会・国際会議などで成果の発信を行う。

4) わが国に適した ICD-11 の構築に関する検討（平成 29～31 年度）

ICD-10 などわが国で現在活用されている疾病分類を整理し、ICD-11 のわが国での実用可能性について検討する。また、わが国の状況に適応した日本版 ICD-11 とするための検討を行い、基礎資料を作成する。

（2）ICD フィールドトライアル研究

1) フィールドトライアルの実施（平成 29～30 年度）

WHO のガイドラインに従い、フィールドトライアルを実施する。具体的には、基本データの収集、ブリッジコーディング、信頼性の評価を行うほか、わが国の実情に沿って翻訳語の統一や追加的な解説を作成する。フィールドトライアルの客観性を高め、バイアスを回避するため、調査対象者の選定法や日本語翻訳の質の改善も実施する。

2) データ解析（平成 29～31 年度）

収集したフィールドトライアルのデータは、

WHO のプロトコルに従った定型的分析を実施する。さらに多変量解析による複数要因間の関係性、改訂前後のコード間の定量的関係性の統計学的推定、国際比較性の検証など、わが国独自の分析を実施する。

3) 分析結果の WHO へのフィードバック（平成 30～31 年度）

フィールドトライアルデータのうち、記述的データ及び標準的分析結果を WHO へ提出する。

4) ICD-11 の実用可能性検討および今後の課題抽出（平成 30～31 年度）

フィールドトライアルの結果を踏まえて、ICD 改訂に伴う統計データへの影響について統計学的観点から分析を実施する。また医学知識体系との一致性など ICD と科学的根拠との関係について考察するほか、ICD の利用に関する課題を抽出し、WHO や国際的なパートナーと課題を共有する。

（３）ICF 活用研究

1) ICF を用いた評価法や情報共有法の構築と情報発信（平成 29～30 年度）

ICF の基本構造である「心身機能・身体構造」「活動」「参加」に加え、「健康状態」と「環境因子」「個人因子」などについて、それぞれ具体的なチェック項目の案を作成し、ICF を用いた評価法や情報共有法の構築を試みる。開発した方法は、各種学会や WHO 会議などでの情報提供と発信を行う。

2) 「リハビリ実施計画書」など ICF を用いた評価法や情報共有法の試験運用（平成 29～31 年度）

国立成育医療研究センターや杏林大学病院、藤田保健衛生大学病院などの施設において、評価法や情報共有法を試験運用し、その実用可能性について分析を実施する。

（倫理面への配慮）

研究分担者、研究協力者ともに、本研究に関連し、開示すべき COI 関係にある企業はない。

C．研究結果

（１） ICD 改訂動向研究

1) ICD-11 国内検討会の組織

本研究班として ICD-11 国内検討会を組織し、メールなどを通じて各学会からの意見調整を図る形で意見の集約化を行った。なお、本年度は検討会会議の開催は行わなかった。

2) ICD 改訂に関する分析と提言

ICD 改訂に関しては、本報告書の小松論文において、ICD-11 における生活機能分類を示す V-chapter（V Supplementary section for functioning assessment）に関する分析を実施した。具体的には、ICF の視点から V-chapter の構造に関する分析を行い、ICD と ICF の相互利用の可能性について検討を行った。

また、本報告書の滝澤論文において、ICD-10 と ICD-11 の分類に関する比較分析を実施し、わが国における ICD-11 実用化の際に考慮すべき項目であることを確認した。

3) ICD 改訂に関する動向把握と意見発信

本研究班の研究分担者である国際医療福祉大学の小川が 2018 年 6 月に WHO 本部において開催された ICD-11 公表会議に出席し、公表された ICD-11 について把握するとともに、今後の作業、さらには各国適用に向けた準備動向などに関する情報収集を実施した。

また、WHO-FIC ネットワーク年次会議に出席し、ICD 改訂の最新動向を把握したほか、これまでの ICD-11 構築に関する経緯と構築作業のわが国の貢献について取りまとめ、医療情報学連合大会にて企画シンポジウムを開催した。

ICD 公表後の各国への適用については、ICD-10 の適用には 5 年以上かかった国が多かった

ものの、ICD-11 は電子的に提供されることもあり、数年で適用を開始する国が出てくると WHO は想定しているとのことであった。また、多言語対応についても、各国の多言語化をサポートするための枠組みを用意しており、すぐにでも ICD-11 の多言語化が可能であるとのことであった。なお、多言語化は最低でもカテゴリー名までは翻訳する必要があるものの、各項目の定義などの内容については翻訳できていなくても良いとのことであった。

ICD-11 はウェブ上で公開されることが決まっているが、同時に印刷版のニーズも少なからずあると考えられる。この印刷版については、WHO としても検討中とのことである。

4) わが国に適した ICD-11 の構築に関する検討

本報告書の今井論文において、ICD-11 日本語版コーディングツール作成にむけて、英語版の ICD-11 エンティティの訳出を効率化するツールの開発並びに ICD-10、11 対応の日英索引表管理 Web プラットフォームの運用テストと課題抽出を行った。本年度研究の成果として ICD-11 coding tool の日本語版言語拡張の実現に向けた作業効率化が図られると共に、今後取り組むべき技術的課題が明らかとなった。

平成 30 年度は、ICD-11 日本語化に向けた検討部会であるワーキンググループ（以下、日本語化 WG）を組織し、定期的に会議を開催して ICD−11 の日本語化に向けた方針の検討と作業の実施を行った。日本語化 WG のメンバーは以下の通りである。また、厚労省 ICD 室にも日本語化 WG への参加を要請した。

奈良県立医科大学　今村知明
東京大学　今井　健
奈良県立医科大学　小松雅代
奈良県立医科大学　西岡祐一
国際医療福祉大学　滝澤雅美
国際医療福祉大学　小川俊夫

日本語化 WG の開催日時および開催場所は以下の通りである。

第１回　2018 年 3 月 28 日 13〜15 時
厚生労働省
第２回　2018 年 4 月 26 日 15〜17 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第３回　2018 年 5 月 30 日 15〜17 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第４回　2018 年 7 月 4 日 13〜15 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第５回　2018 年 8 月 29 日 13〜15 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第６回　2018 年 9 月 27 日 13〜15 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第７回　2018 年 11 月 5 日 15〜17 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス

（２） ICD フィールドトライアル研究

ICD-11 フィールドトライアル(FT)は、ICD-11 の適用性、信頼性、有用性などを検討するため国際的に共通のプロトコルで行われた。本研究では、国外の ICD-11FT の実施状況の調査に加え、2017 年に実施された我が国における ICD-11FT の解析を行った。ICD-11FT では ICD-10 コーディングに比べて明らかに有利な結果は得られなかった。

また、ICD-11 に関する情報の普及を目的とした雑誌「保健医療科学」の特集号を出版したほか、ICD 関連の情報を集約した ICD ポータルサイトの構築を試行した。詳細は本報告書の各論文を参照されたい。

（３） ICF 活用研究

ICF 活用研究として、国際生活機能分類を用いたリハビリテーション連携に関する研究（本報告書・橋本論文）、ICF における評価尺度としての信頼性・妥当性検証（本報告書・山田論文）、リハビリテーション連携に用いる ICF に基づく生活機能チェックリストの作成とフィールドテストの実施（本報告書・向野論文）、および、ICF カテゴリーおよび ICF コアセットの信頼性・妥当性と臨床的有用性の検討（本報告書・木下論文）を実施した。詳細は各論文を

参照されたい。

D．考察

本研究は、ICD 改訂動向研究、ICD フィールドトライアル研究、ICF 活用研究の 3 つの研究班より構成されている。

ICD 改訂動向研究では、ICD 改訂動向について各種の国際会議への参加などを通じて情報収集と分析を実施したほか、各学会などの意見を幅広く収集し、その結果については幅広く意見発信を行った。

ICD-11 は 2018 年 6 月に公表され、さらに 2019 年 5 月の World Health Assembly にて承認される予定であり、その後各国への導入が始まるものと考えられる。わが国においても ICD-11 の導入に向け、わが国の臨床や研究で利用されている従来分類との整合性の確保や ICD-11 の日本語化など具体的な検討が開始されている。これらの作業を実施しつつ、わが国にとって実用的でかつ国際的にも受け入れられる分類の構築を実現するために、今後も ICD-11 改訂の動向を注視し、WHO に対して提案することが重要である。

本研究において、ICD-11 の改訂内容について、コーディングツールを含めた多言語対応や ICD-10 と ICD-11 の分類体系の比較分析などを通じてその内容について精査すると共に、わが国への適用について検討を実施した。また ICF と ICD-11 との関連分析により、今後の ICD-11 および ICF の活用のあり方についても検討を実施した。さらに、ICD フィールドトライアル研究において、ICD コーディングツールの日本語化への課題を明らかにした。

今後、わが国では ICD-11 の活用に向けた具体的な検討が開始されると思われるが、わが国の医療分野全般で活用可能な分類にするためには、正式発表後もより実用的な分類となるよう積極的に意見を提案する必要があり、また国内では日本語化などわが国への対応に向けた様々な作業が発生すると考えられる。これらの作業を実施しつつ、今後も ICD-11 改訂の動向を注視し、わが国にとって実用的でかつ国際的にも受け入れられる分類の構築を WHO に対して提案することが重要と考えられる。

ICF 活用研究では、ICF の概念に基づいて開発された尺度について評価を行い、その有用性について確認したほか、ICF に基づく生活機能チェックリストの作成とフィールドテストを行った。これらの研究を通じ、ICF のわが国における実用化の進展について考察を実施した。

E．結論

ICD 改訂動向研究で、ICD 改訂動向について各種の国際会議への参加などを通じて情報収集と分析を実施したほか、各学会などの意見を幅広く収集し、その結果については幅広く意見発信を行った。また、ICD-11 の日本語化の検討や ICF との関連などについて幅広く分析を実施した。ICD フィールドトライアル研究を通じてその実用性について検討を実施した。ICF 活用研究では、その機能と実用化に向けた検討を実施した。本研究班は、ICD-11 および ICF の改訂・改正情報を把握し、わが国での活用に向けた議論を行うという目的を達成したと考えられる。引き続き ICD-11 のわが国への適用と ICF の活用について検討を行う必要がある。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1.論文発表

1) 小川俊夫、滝澤雅美、及川恵美子、中山佳保里、森　桂、田嶼尚子、今村知明．ICD-11 構築の経緯．医療情報学 38(Suppl.): 198-201, 2018.

2) 秋山純一、石川智久、富谷智明、名越澄子、三輪洋人、三浦総一郎、菅野健太郎. 消化器分野での ICD-11 構築の経緯とわが国への適用に向けた課題. 医療情報学 38(Suppl.): 202-205, 2018.
3) 安田和基. 糖尿病分野での ICD-11 構築の経緯と今後に向けた課題. 医療情報学 38(Suppl.): 206-207, 2018.
4) 星野卓之. 伝統医学分野での ICD-11 構築の経緯とわが国への適用に向けた課題. 医療情報学 38(Suppl.): 208-209, 2018.
5) 小松雅代、髙井優奈、及川恵美子、森桂、小川俊夫、城島哲子、今村知明. ICD-11 における生活機能分類の意義 -ICF と V 章の関連と統合-. 医療情報学 38(Suppl.): 210-213, 2018.
6) 森　桂、及川恵美子、阿部幸喜、中山佳保里. ICD-11 の我が国への適用に向けて. 医療情報学 38(Suppl.): 214-215, 2018.
7) 今井　健. ICD-11 の機能からみた我が国への適用について. 医療情報学 38(Suppl.): 216-218, 2018.
8) 滝澤雅美、小川俊夫、今井 健、小松雅代、及川恵美子、阿部幸喜、中山佳保里、森桂、田嶋尚子、今村知明. 詳細不明コードから見た ICD-11 への構造変更に関する一考察. 医療情報学 38(Suppl.):796-798, 2018.

２．学会発表

1) 小川俊夫. ICD-11 構築の経緯. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
2) 秋山純一. 消化器分野での ICD-11 構築の経緯とわが国への適用に向けた課題. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
3) 安田和基. 糖尿病分野での ICD-11 構築の経緯と今後に向けた課題. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
4) 星野卓之. 伝統医学分野での ICD-11 構築の経緯とわが国への適用に向けた課題. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
5) 小松雅代. ICD-11 における生活機能分類の意義 -ICF と V 章の関連と統合-. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
6) 森　桂. ICD-11 の我が国への適用に向けて. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
7) 今井　健. ICD-11 の機能からみた我が国への適用について. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
8) 滝澤 雅美・他. 詳細不明コードから見た ICD-11 への構造変更に関する一考察. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.25.
9) 小松雅代・他. ICD-11 における V-chapter の構造と既存尺度との関連性：ICF の活用と有効な国際統計としての適用. WHO-JAPAN Forum 2018. November 30, 2018.
10) Masayo Komatsu, et al. Structure and roles of V-chapter in ICD-11: A comparison with ICF and its application as effective in-ternational statis-tics1 Structure and roles of V-chapter in ICD-11. WHO Family of International Classifications (WHO-FIC) Network Annual Meeting 2018, Seoul, Korea, October 22-27,2018.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

＜参考資料＞

ICD-11 Release Event 出張報告

日時：2018 年 6 月 18 日（月）12:00 – 14:00pm
会場：Salle D WHO HQ main building 7F

国際医療福祉大学　小川俊夫

2018 年 6 月 18 日に ICD-11 Release Event が WHO 本部で開催された。以下はその報告である。なお、この ICD-11 Release Event は WHO 本部 7 階の会議室で開催され、出席者の多くが WHO 本部職員であったが、WHO 地域事務局とビデオ回線経由での報告がなされた。

1. 開会

Dr. John Grove (Director, Information, Evidence and Research Cluster, WHO) による開会の挨拶に続き、Dr. Tedros Ghebreyesus (Director General, WHO) のビデオ挨拶および日本病院会の末永副理事長の挨拶があった。Dr. Grove から、この ICD 改訂は 11 年かかり 280 近くの専門機関と数百人以上の専門家が関与したという点で、WHO の中でも類を見ない大規模な事業との説明があった。また、日本病院会からの長期間の資金提供に対して WHO からの感謝の意が表された。末永副理事長からは、日本病院会が組織としてこの事業に関与したことの説明があり、また ICD-11 公表にお祝いの言葉を述べられた。

2. ICD−11 の新しい機能

ICD-11 の機能について、Professor Chris Chute (Johns Hopkins University)から説明があった。ICD は従来より主として死亡統計と罹患統計で利用されていたが、ICD-11 でもこれらが引き続き利用可能なことに加え、臨床面では医療の質向上や治療マネジメント、健康状態の向上などへの活用が期待されており、さらに医療費の審査支払などへの活用も期待されている。また、これまでよりも幅広い活用として、アウトカム研究などへの活用可能性についても言及された。

ICD-11 の新たな機能としては、Post-coordination の概念を導入して疾病分類を組み合わせることを可能にしたことで、分類の幅が大幅に広がったことが挙げられた。また、この機能に伴い章立ての構成が変わったことや、痛みや身体機能などの新たな情報の付加が簡易に可能となった点も指摘された。さらに、全ての情報は Foundation に保存されており、ICD-11-MMS は死亡統計および罹患統計のために Foundation からリニアライゼーションで抽出されたもので、今後必要に応じて新たな分類を Foundation から抽出することが可能であるとの説明がなされた。

上記の機能は ICD-11 が電子的に構築されたことにより実現されたものであり、Ontology の概念を用いた構築と運用を実現したとの説明があった。さらに、ウェブでの公開により常に最新の ICD へのアクセスが可能であることと、ICD Coding Tool により疾病の検索とコーディングがより容易になったことも指摘された。また、Application Programme Interface (API)の活用が可能になったことで、ICD-11 を用いた様々なアプリケーションの開発などが期待され、ICD の利用可能性が大きく向上したことが述べられた。

3. ICD-11 の新たな運用と分類

ICD-11 の新たな運用と分類について Dr. Robert Jacob (WHO)から説明があった。ICD-11 が電子化されたことにより、その運用が大きく変化した。例えば、Foundation を電子的に管理することや分類やルールなどの公表、メンテナンスが全てオンラインで行われるようになり、またアップデートのタイミングや内容が電子化により迅速になるなどの改善された点が報告された。

ICD-11 の分類についても、ICD-10 から大きく変化した部分について説明があった。例えば、新生物の内容ががん登録に適したものに変更になったほか、AMR (antimicrobial resistance)やゲーム依存症（Gaming Disorder）などが新規に追加された。また、糖尿病は臨床で使いやすい分類として変更された。章立ても変更となり、伝統医学や身体機能などを含む 6 つの章が新たに追加された。

Dr. Jacob の説明に続いて、ICD-11 改訂作業について WHO が直接関与した母子保健（Maternal and Sexual Health）と精神医学（Mental Health）分野における改訂作業について報告があった。特に、精神医学分野で新たに追加された Gaming Disorder が世界的に注目されている点などが説明された。

4. ICD-11 の各国適用

WHO の Dr. Nenad Kostanjsek より、ICD-11 の Implementation package について説明があった。ICD-11 の加盟各国への適用に向けて、ICD-11 にはその円滑な適用を目的とした様々な機能が付加されたとの説明があった。第一に、ICD Coding Tool、ブラウザ、ICD-11 APIs、翻訳ツールなどの 4 つの新たな機能が実装されたことである。第二に、各国への適用の際に用いられる Transition Guidance が用意され、その内容としては ICD-10 から ICD-11 への transition table、transition guide and advocacy materials、さらに他の分類とのマッピングツールなどである。第三に、ICD-11 適用のための様々な教育を行うことであり、その一環としてコーディングの教育と自己評価が可能な ICDfit も開発された。

ICD-11 の各国への適用については、タイの WHO-FIC 協力センターから報告があったほか、WHO の各地域事務局からも地域での ICD-11 への適用と期待について報告があった。

5. その他

最後に質疑応答セッションがあり、Gaming Disorder の追加や ICHI との連携、医療機器と分類の関係などについて質問があった。質疑応答セッション後に Dr. Soumya Swaminathan (Deputy Director General for Programmes, WHO)より終了の挨拶があり、Dr. Grove により会議終了のアナウンスがあった。

なお、会議終了後に WHO の Dr. Robert Jacob と会談し、12 月 10 日よりベトナムでワークショップが企画されており、その前後での日本訪問は必要に応じて可能とのことであった。仮に Dr. Jacob を日本に招聘する場合は、追ってメールで調整することを確認した。

以上

WHO-FIC ネットワーク会議 2018（韓国・ソウル）
2018 年 10 月 22 日（月）9:30～　Council のまとめ

国際医療福祉大学　小川

１．WHO・Robert Jacob によるプレゼン

今年は Alta Ata 宣言から 40 年の節目の年である。この 40 年間で世界各国では死亡情報の整備が進んでいるものの、まだ十分とは言えないのが現状である。また、医療情報が様々に利用されるようになっていることから、医療情報の統合とそのより一層の活用が重要と考えられる。

＜WHO-FIC ネットワーク＞
WHO-FIC 2018 には、54 カ国から 240 人が参加している。昨年度からの WHO-FIC ネットワークの動向については、ベネズエラ WHO-FIC 協力センターが閉鎖になった一方で、中国、ブラジル、スペイン、ロシアが加入準備中である。

＜ICD＞
ICD-10 の最後のアップデートを 2019 年に予定している。ICD-11 は 2018 年 6 月に公表され、実用化に向けて準備中である。今後 ICD-11 は 2019 年 1 月の EB を経て 2019 年 5 月の WHA にて承認される予定である。なお、ICD-11 の index term は 102,000 項目になると予想される。
ICD-11 の TM 章として漢方がまずは収載されたが、他の伝統医学での疾病分類についても、近い将来導入される予定である。

＜ICF＞
ICF は普及に向けた各種作業が行われている。また ICF update が公表され、ICD-11 に V 章として導入された。さらに、WHODAS for children の開発が行われているほか、ICF のファウンデーションの開発とデジタル化に取り組んでいる。なお、ICF の名称については、ICD のような数字を用いた名称にはならない予定である。

＜ICHI＞
ICHI はベータ 2 版が公開され、フィールドテストの準備を行っている段階で、実用化に向けた最終段階である。

２．WHO-FIC ネットワーク内の各委員会の活動
（１） FDC
これまでの成果としては、WHO-FIC Family Paper の執筆を進めており、最終ドラフトが完成した。ICHI については、2018 年 5～6 月にアルファテストを実施したほか、ICHI-FiT tool の開発を進めており、2019 年度にはベータテストを実施する予定である。ICHI ベータ 2 版も完成に近づいており、2018 年 10

月に発表予定である。現在取り組んでいる課題としては、UHC の把握のための指標づくりや ICD-11 のプライマリケア版の作成、さらに ITC と共同で実施中のマッピングプロジェクトなどである。

（２） EIC

これまでの成果としては、WHO-FIC Implementation database の構築を進めているほか、ICD-11 と ICF の e-learning tool の開発を進めたことである。現在取り組んでいる課題としては、データベースの内容の充実と、ICD-11 および ICF のトレーニングの実施である。

（３） ITC

これまでの成果としては、white paper のドラフト版を執筆したことと、ICD-API の開発である。また ICD ブラウザや ICD Coding Tool などの開発を実施したほか、プロポーザルシステムのアップデートを実施した。現在取り組んでいる課題は、特になしであった。

（４） MSAC

これまでの成果としては、約 5,000 件の疾病定義をレビューしたほか、例えば副腎皮質刺激ホルモン単独欠損症（ACTH Deficiency）など 24 件の主要な医学的な課題について議論を行った。現在取り組んでいる課題は、CSAC との業務の分担についての検討であった。

（５） CSAC

これまでの成果としては、ICD-10 については 88 件、ICF は 24 件の recommendation を取りまとめたほか、ICD-11 のプロポーザルについては多数検討を実施した。ICF については 41 件の新たなプロポーザルを受理したほか、既存のプロポーザルを含めて 47 件については決議を行った。また ICF の updating プラットフォームを用いることで、より効率的な更新が可能となった。現在取り組んでいる課題は主に ICD についてであり、ICD の更新システムと手順についてさらなる作業を実施する予定である。また、CSAC、MSAC、MRG、MbRG などとの協力体制についても検討が必要であり、さらに今後 ICD-11 のプロポーザルがかなりの量になると予想されるため、その処理について検討が必要である。

（６） MRG

これまでの成果としては、mid-year meeting を実施したことであり、現在取り組んでいる課題としては、ICD-11 の死亡ルールのレビューである。

（７） MbRG

これまでの成果としては、mid-year meeting をカナダ・バンフで実施したことであり、現在取り組んでいる課題としては、コーディングルールの構築を行っていることである。

（８） FDRG

これまでの成果としては、ICF update の構築や教育の実施、ICD-11 のリファレンスガイドの構築などであり、また mid-year meeting をドイツ・ハンブルグで実施した。現在取り組んでいる課題としては、ICF Practical Manual のアップデート、ICD 2017 年版、WHODAS Children version、WHODAS training manual、ICF education、ICF Ontology などである。

３．ICHI に関するプレゼン（Richard Madden）

診療行為に関する分類は、1978 年に発表された International Classification of Procedure in Medicine が最初と言われているが、この分類は外科的な項目が中心であった。これに対して幅広い診療行為の分類を構築するために ICHI のプロジェクトが 2007 年よりスタートした。2018 年時点でベータ 2 版が完成し

テストを実施している。

ICHI beta2 版の特徴としては、まずかなり安定した分類となったこと、7,000 項目の診療行為があること、ICHI プラットフォーム上で稼働することなどであり、また ICD-11 のエクステンションコードのような組み合わせが可能となっており、ICHI Extension codes と呼ばれている。ICHI education も実現に向けた準備を実施している。またフィールドテストを実施しており、昨年度の WHO-FIC メキシコ会議以降、25 件のフィールドテストを実施しており、リハビリとの共同作業も進行している（Rehab2030）。

今後の予定としては、2019 年に ICHI Potential Version が発表される予定であるほか、WHO-FIC ネットワークにおいて、Health Intervention Reference Group の組織に向けて提案を実施している。また、ICHI と ICD の共通のファウンデーション構築についても検討している。

４．プライマリヘルスケアに関して（FDC）

プライマリヘルスケア（PHC）の普及は WHO の work plan に明記されており、WHO-FIC ネットワークとして実現可能な貢献について議論すべきである。例えば、PHC のための ICD や ICF のスペシャリティ・リニアライゼーションなどについて検討すべきである。そのため、FDC の中に PHC Task group を設置し、検討することになった。

以上